

# 2017 年度学生委員会報告書

公益財団法人 日本財団学生ボランティアセンター

2017 年度学生委員会



## I. 学生委員会の目的

学生委員会（以下、「委員会」という。）は、公益財団法人日本財団学生ボランティアセンター（以下、「センター」という。）定款第 45 条の規定による専門委員会として、学生の様々な意見を取り入れるために設置している（規 14 号 第 1 条）。センター事業に関する助言又は提案を任務としている（同 第 2 条）。

## II. 学生委員

本年度の学生委員（以下、「委員」という。）は、2017 年 5 月 23 日に行われた第 10 回理事会において選任された。委員は、センター実習生、留学生、ボランティアに精通している者、センターのプログラム参加者、大学ボランティアセンター学生スタッフかつ地方大学在籍者の 6 名である。委員の選任理由は以下の通りである。

- ・永田 久実(明治学院大学 社会学部 社会福祉学科 3 年)\*委員長  
本年度よりセンター実習生。昨年度センター事業の PR カンテスト運営に明治学院大学ボランティアセンター「1day for others」リーダーとして参加、「ながぐつ」プロジェクトにも参加。本人に学生委員を希望する強い意思があり、委員長としての活躍も期待できるため。
- ・タバ サキーラ(東洋大学大学院 国際地域学専攻 博士後期課程 3 年生)  
ネパール出身。トリブバン大学卒業後、教育省で 5 年間勤務。学校教員のコンピュータトレーナーを経て 2013 年来日、東洋大学大学院入学。ネパールの若者たちの教育開発を研究しており、センターの学生ボランティア支援への意見が期待できるため。
- ・都築 則彦(千葉大学 理学部 物理学科 4 年)  
学生ボランティアフォーラム学生委員を 2 期務め、27 大学の学生が所属し 2020 年東京オリンピック・パラリンピックに向けて活動する学生団体おりがみ代表でもあり、ボランティア・学生の社会参画について積極的な意見を期待できるため。
- ・今関 恭平(日本大学 生物資源科学部 国際地域開発学科 4 年)  
センターの熊本地震ボランティア派遣への参加、2016 年度実習生自主企画へゲストとして登壇。これまでに献血、災害復興、地域活性等、様々な分野のボランティアに参加し、「ながぐつ」プロジェクトをはじめとしたセンター事業へのプログラム提案などが期待できるため。

- ・桑山 千香子 (愛知淑徳大学 交流文化学部 交流文化学科 2年)

愛知淑徳大学コミュニティコラボレーションセンター学生スタッフとしてボランティアに関心がある学生との関係が深く、東海地域の学生ボランティア動向に関して情報を期待できる。また、米国NPOでのインターシップに参加するなど、海外ボランティア情報も期待できるため。

- ・山本 賢(東北大学 文学部 日本語教育学専修 2年)

東北大学課外・ボランティア活動支援センター・ボランティア支援学生スタッフ(SCRUM)の本年度代表として、ボランティアに関心がある学生との関係が深く、東北での学生ボランティアの動向に関する情報が期待できるため。

### III. 開催概要

委員会を4回開催した。3回をセンターにて、1回を山本委員の在籍大学である東北大学にて開催した。開催の日時・場所は委員会で検討の結果、決定した。

#### 第1回委員会

日時：2017年6月18日(日)12:00-14:30

場所：センターミーティングスペース

参加者：委員5名(タパ委員欠席)、職員1名

議事要旨：・委員へのセンター設立趣旨・事業概要説明と質疑応答

・各委員より自身のボランティア活動についての説明と質疑応答

・本年度委員会で扱う審議事項の検討

#### 第2回委員会

日時：2017年8月17日(木)14:00-16:30

場所：センター6階会議室

参加者：委員5名(都築委員欠席)、職員1名

議事要旨：・センター事業についての意見交換

※委員会前に、委員各自がセンターホームページ等で事業詳細を確認

・Gakuvo Style Fund、学生ボランティア派遣など各事業への提案を検討

### 第3回委員会

日 時：2017年11月18日(日)15:30-18:30

場 所：東北大学川内キャンパス

参加者：委員6名、職員、オブザーバー3名（東北大学 SCRUM）

議事要旨：  
・委員やオブザーバーに共通する活動の悩み・課題について意見交換  
・首都圏以外の学生・学生団体へのセンターによる支援事業について意見交換

その他：  
・同日に以下の2つを実施

- ・せんだい3.11メモリアル交流館見学：山本委員が代表を務める SCRUM が活動の原点とする東日本大震災とそのボランティアへの理解を深めるため
- ・情報交換会：委員と SCRUM や東北大学のボランティア団体が参加

### 第4回委員会

日 時：2018年2月23日(金)14:30-17:00

場 所：センター6階会議室

参加者：委員6名、職員

議事要旨：  
・理事会での提案事項を検討

- ・委員会討議事項についてふりかえり
- ・次年度委員会の実施形態や委員選任などについて意見交換

## IV. センター事業への意見および提案

センター事業に対し、委員会での検討をもとに意見および提案をまとめた。委員会では、センターの存在が学生・学生団体にとって貴重なものであり、センター事業についても評価できるとの意見があった。ただし、現在学生である委員の目線で、センター事業を見ていくと、現事業にも改善が必要な点や新しい事業が必要であると感じられることも多々あった。以下の意見および提案には、次年度からの反映が難しいこともあるだろうが、検討を願う。

### 1. Gakuvo Style Fund

#### ① 評価できる点

- ・他の助成金制度と違い、応募団体が集まり交流できる仕組みや実践的なスキルアップにつながる講演がある。

#### ② 意見・提案

- ・7月後半のプレゼン審査会は大学が定期試験期間の学生が多く、できる限り避ける。

- ・協力金額の上限が3段階あるが、あまり差を付けず、より多くの学生団体および個人(留学生含む)を支援する。
- ・開催時間が長いため、コースごとに開催日程を分ける。
- ・応募団体の活動内容が載ったパンフレットがあると交流できる。
- ・学生団体の新規プロジェクトに対する助成金制度は多いが、継続的なプロジェクトへの助成金制度を設ける。

## 2. 大学等と連携したボランティア関連講座、ボランティアプログラムの開発及び実施

### ① 評価できる点

- ・各大学の特徴を生かしたプログラムを実施している。

### ② 意見・提案

- ・プログラムに参加できる学生は限られているため、その大学に所属する学生であるならば誰でも参加できるようなプログラムを設ける。

## 3. 学生ボランティア派遣

### ① 評価できる点

- ・ホームページに活動報告が細かく記載されている。
- ・学生の学びを大切にしている。
- ・交通費や宿泊費がセンター負担で参加しやすい。

### ② 意見・提案

- ・「ながぐつ」プロジェクトは、募集開始が直前であるため、定期的にホームページを確認する必要がある。メールやLINE等へ登録し、次回募集日程が届くお知らせ機能を設ける。また、活動日程が過密で、参加後に体調を崩す学生もいるため、スケジュールを見直す。
- ・グローバル・リーダーシップ・プログラムをインドネシア以外の国でも行う。

## 4. セミナー/シンポジウムの開催

### ① 評価できる点

- ・PR力コンテストは、ボランティアに必要なPR力を鍛え、動画の作成により活動を見直すきっかけになる。作成した動画は今後の広報に活用できる。
- ・ボランティアシンポジウムは、他の学生が多く集まるイベントと比べて、団体や個人の悩み等を相談できる場となっており、魅力がある。

### ② 意見・提案

- ・PR力コンテストは技術で勝敗が決まる可能性が考えられる。映像だけでなく、ポスター、チラシ、Web、プレゼンテーションなど他部門を実施する。
- ・ボランティアシンポジウムを定期的かつ大学長期休暇期間中の開催を強く望む。

- ・ボランティアシンポジウムは、発表がセンターと協定を結んでいる大学の学生に限られているため、協定大学以外の学生が参加できるような仕組みをつくる。

## 5. 委員会

### ① 評価できる点

- ・委員会を東北大学で行い、オブザーバーに入ってもらった。

### ② 意見・提案

- ・より幅の広い意見交換のため、学生委員に加え、センター実習生や委員所属団体の学生などがオブザーバーとして参加させる。
- ・委員会の議論を深め、提案を練るために宿泊をとまなう委員会を開催する。

## 6. 新規事業について意見と提案

- ・ボランティアしたい学生と学生団体を繋げることや学生団体同士の交流を活性化させるために、センターに関わる学生団体の情報まとめサイトを開設する。また、学生団体は活動経費の確保が難しいという問題があるため、学生団体が応募できる助成金制度や協賛企業のまとめサイトを開設する。
- ・ボランティアセンター未設置大学に、所属大学の学生と共に設置を働きかける。
- ・センターのプログラムは東京都内や都内出発で行われることが多く、地方学生が交通費等の理由により参加しづらいため、地方向けプログラムを実施する。
- ・「ながぐつ」プロジェクトやグローバル・リーダーシップ・プログラムは宿泊を伴うため、ボランティア参加経験の少ない学生にとってはハードルが高いと考えられる。日帰りのプログラムの実施もする。

## V. まとめ

委員は、4回の委員会を通して、センター事業について意見交換を行い、委員会として本報告書をまとめた。各委員は、委員会や他のセンター事業に参加する事により、徐々にセンター事業の価値や課題を見出せたのはもちろん、そこから得られた学生団体の抱える課題や対策についての気づきを、委員自身の学びと活動に還元していった。委員同士や、委員とセンター事業参加学生との新たな繋がりも構築され、展開も期待される。このように、委員会自体も委員にとって有益な事業の1つであったと考えられる。センター理事会において、委員会を学生目線でのセンターへの助言および提案を行う貴重な場と考え、かつ委員自身の成長にとっても重要な機会と捉えて、今後も委員選任を行っていくことに期待して、本報告書のまとめとする。